

二〇二五年度一般選抜入学試験問題

国語

一般選抜入学試験（A日程）

二月十三日

時間 十三時～十四時二十分（八十分）

注意事項

- 一、問題は問題一から問題三（A）（B）まであります。（二頁～二十五頁）
- 二、問題三は、選択問題です。（A）か（B）のいずれかを選択して下さい。ただし、日本語・日本文学科の受験者（専願・併願）は（B）を選択してください。
- 三、座席番号・受験番号は、解答用紙の所定の欄に記入してください。
- 四、解答はすべて解答用紙の指定された箇所に入力してください。
- 五、試験終了まで退室できません。

問題一

次の文章は石川淳「桑の木の話」（一九二四年）の一節です。よく読んで後の問に答えなさい。なお、設問の都合により、一部省略した箇所があります。

※この問題は、著作権の関係により掲載できません。

タイトル .. 桑の木の話

著者 .. 石川 淳

出版社 .. 講談社

ページ数 .. 67 ～ 76

※この問題は、著作権の関係により掲載できません。

※この問題は、著作権の関係により掲載できません。

※この問題は、著作権の関係により掲載できません。

※この問題は、著作権の関係により掲載できません。

問一 波線部(1)～(5)の片かなを、漢字で書きなさい。

問二 傍線部1について。このことを言い表した表現を、二五字以内で書き抜きなさい。

問三 空欄Xを補うのに、最も適切なものを次から選び、記号で答えなさい。

ア 能動的 イ 消極的 ウ 運命的 エ 活動的 オ 相対的

問四 傍線部2について。なぜ「夜襲」という言葉が用いられているのですか。最も適切なものを次から選び、記号で答えなさい。

ア 本当は桑の木の葉を必要としているのは親たちなのに、子供を使ってもらいに行かせているため。

イ 昼間に桑の木の葉をもらいに来ていた子どもたちが、夜になってからもらいに来るようになったため。

ウ 借家人の許可を得ていない近所の人たちが、夜になってから桑の木の葉を盗んでいくようになったため。

エ 西村さんの許可を得ていない人たちが、桑の木の葉をもらいに夜に彼を呼び出すようになったため。

オ 家主の許可を得ていない人たちが、夜になってから桑の木の葉を取って荒らしていくようになったため。

問五 傍線部 3 について。「彼」がこのように思ったのはなぜですか。最も適切なものを次から選び、記号で答えなさい。

ア 引越して来たばかりで、彼にも妻にも家主の妻以外、知り合いがないから。

イ 家主の妻であれば、子供を使わずに、自ら桑の木の葉をもらいに來ることができから。

ウ 彼の家に來るのは子供ばかりで、大人の女性が訪ねてきたのは初めてだったから。

エ 桑の木の葉をもらいに來る人以外で、彼の家に用事があるのは家主の妻しかいないから。

オ 桑の木が荒れていることを指摘する女性は、所有者である家主の妻に違いないと考えたから。

問六 傍線部 4 から続く女性のものの言い方に、どのような意図が読み取れますか。最も適切なものを次から選び、記号で答えなさい。

ア 桑の木の手入れをきちんとせず荒らしてしまっていることを注意し、正しい手入れ方法を教えたい。

イ 元々は自分の家にも桑の木があったのだと伝え、自分の家が劣っているわけではないと主張したい。

ウ 近所のルールは自分の方が良く知っており、越してきて日が浅い一家に知らせたい。

エ この家の桑の葉は自分が優先的にもらえるはずなのに、その権利が侵害されていることを伝えたい。

オ 家主の西村さんとは自分の方が親しいということを知らしめて、自らの優位性を確立させたい。

問七 傍線部5について。「彼」がこのように思ったのはなぜですか。最も適切なものを次から選び、記号で答えなさい。

ア 最初は関心を持てなかったが、毎日見ている間に、桑の木に対する愛着を抱き始めたから。

イ 桑の木には少しも関心はないが、他人の家の木の葉を許可なく奪っていく姿に、強欲さを感じたから。

ウ あまりに皆が葉をむさぼるため、だんだん荒れていく桑の木に対し、同情心のような感情を抱いたから。

エ 近所の人たちに、蚕を育てるためなら他の命を犠牲にしてもかまわないという、傲慢さを感じたから。

オ 東京では考えられない近所の人たちの凶々しさを見て、田舎の人に対する嫌悪感が沸き起こったから。

問八 傍線部6について。この箇所からわかる「彼」の心情はどのようなものですか。五〇字以内で書きなさい。

問題二 一次の文章を読み、後の問に答えなさい。なお、設問の都合により、一部省略した箇所があります。

※この問題は、著作権の関係により掲載できません。

タイトル … 詩とことば

著者 … 荒川 洋治

出版社 … 岩波書店

ページ数 … 2 ～ 14

※この問題は、著作権の関係により掲載できません。

※この問題は、著作権の関係により掲載できません。

※この問題は、著作権の関係により掲載できません。

※この問題は、著作権の関係により掲載できません。

※この問題は、著作権の関係により掲載できません。

問一 傍線部イ、二の漢字の読みを、ひらがなで書きなさい。

問二 空欄 a、b、c を補うのに、最も適切なものを次からそれぞれ選び、記号で答えなさい。

ア たしかに イ それゆえ ウ おそらく エ なにしろ オ まさか カ あくまで

問三 傍線部 I、II について。この文のような表現法を何と言いますか。次からそれぞれ選び、記号で答えなさい。

ア 直喩 イ 隠喩 ウ アイロニー エ 倒置法 オ 対句法

問四 傍線部①について。本文中に述べられている、詩における「行分け」の効果を二つ、☒より後から探し、六字と一〇字で書き抜きなさい。

問五 傍線部②について。このように感じる理由として、最も適切なものを次から選び、記号で答えなさい。

ア カギ括弧でくくられているから。

イ 直前で改行されているから。

ウ 文脈から見ても予想のつかない内容だから。

エ 主人公の心理を表現しているから。

オ 小説の体裁の文章ではないから。

問六 空欄Aを補うのに、最も適切なものを次から選び、記号で答えなさい。

ア 劇物 イ 生物 ウ 異物 エ 日用品 オ 稀少品

問七 空欄Bを補うのに、最も適切なものを次から選び、記号で答えなさい。

ア 感動 イ やすらぎ ウ 疎外感 エ 不安 オ したしみ

問八 傍線部③について。「くらし」という詩において、行分けという技法を通して到達する境地とは何ですか。二〇字（記号を含む）で書き抜きなさい。

問九 二重傍線部について。ランブータンの説明の行分けと、詩の行分けの違いについて六〇字以内で説明しなさい。

問題三 (A)

次の文章は島崎藤村の随筆の一篇です。よく読んで後の問に答えなさい。

¹「冬」が訪ねて来た。

私が待受けていたのは正直に言うともっと光沢のない、単調な、眠そうな、貧しそうに震えた、醜く皺枯れた老婆であった。私は自分の側に来たものの顔をつくづく眺めて、まるで自分の先入主²となった物の考え方や自分の予想していたものとは反対であるのに驚かされた。私は尋ねて見た。

「お前が「冬」か。」

「そういうお前は一体私を誰だと思ふのだ。そんなにお前は私を見損なっていたのか。」
と「冬」が答えた。

「冬」は私にいろいろな樹木を指して見せた。あの満天星³を御覧、と言われて見ると古い霜葉はもう疾く^{とく}に落尽してしまつたが、茶色を帯びた細く若い枝の一つ一つには既に新生の芽が見られて、そのみずみずしい光沢のある若枝にも、勢いこんで出て来たような新芽にも、冬の焔^{ほのお}が流れて来ていた。満天星ばかりではない、梅の素生^{すばえ}は濃い緑色に延びて、早や一尺に及ぶものもある。ちいさくなって蹲踞^{しゃが}んでいるのは躑躅^{つづじ}だが、でもがつかつ震えるような様子はすこしも見えない。あの椿の樹を御覧と「冬」が私に言った。日をうけて光る冬の緑葉には言うに言われぬかがやきがあつて、密集した葉と葉の間からは大きな蕾^{つぼみ}が顔を出していた。何かの深い微笑のように咲くあの椿の花の中には霜の来る前に早や開落したのさえあつた。

「冬」は私に八つ手の樹を指して見せた。そこにはまた白に近い淡緑の色彩の新しさがあつて、その力のある花の形は周囲の単調を破っていた。

三年の間、私は異郷の客舎の方で暗い冬を送つて来た。寒い雨でも来て障子の暗い日なぞにはよくあの巴里^{パリ}の冬を思出す。ここでは一年のうちの最も日の短いという冬至前後になると、朝の九時頃に漸く^{よや}夜が明けて午後^{ごご}の三時半には既に日が暮れてしまった。あのボオドレエルの詩の中にあるような赤熱^{しやくねつ}の色に燃えてしかも凍り果てるという太陽は、必ずしも北極の果^{はて}を想像し

ないまでも、巴里の町を歩いてよく見らるるものであった。枯々としたマロニエの並木の間、冬が来ても青々として枯れずにいる草地の眺めばかりは、特別な冬景色ではあつたけれども、あの灰色な深い静寂なシヤヴァンヌの「冬」の色調こそ彼地の自然にはふさわしいものであつた。

久しぶりで東京の郊外に冬籠りした。冬の日の光が屋内まで輝き満ちるようなことは三年の旅の間なかつたことだ。この季節に、底青く開けた空を望み得るといふことも、めずらしい。私の側へ来てささやいていたのは、たしかに武蔵野の「冬」だつた。

「冬」はそれから毎年のように訪ねて来たが、麻布の方で冬籠りするように成つてからは一層この訪問者を見直すようになった。「冬」で思出す。かつて信濃で逢つた「冬」は私に取つて一番親しみが深い。毎年五カ月の長い間も私は「冬」と一緒に暮した。けれどもあの山の上では一切のものは皆な潜み隠れてしまつて、ついぞ私は「冬」の笑顔というものを見たこともなかつた。十一月の上旬といえば早や山々へは初雪が来た。そして暗く寂しい雪空に日のめを仰ぐことも稀な頃になると、浅間のけぶりも隠れて見えなかつた。千曲川の流れですら氷に閉された。私の周囲には降りつもる深い溶けない一面の雪があるばかりであつた。その雪は私の古い住居の庭をも埋めた。どうかすると北向の縁側よりも庭の雪の方が高かつた。軒に垂れる剣のような氷柱の長さは二尺にも三尺にも及んだ。長い寒い夜などは凍み裂ける部屋の柱の音を聞きながら、唯もう穴に隠れる虫のようにちいさくなつていた。

この「冬」が私には先入主となつてしまつた。私はあの山の上で七度も「冬」を迎えた。私の眼に映る「冬」は唯灰色のものだつた。巴里の方で逢つた「冬」はそれほど雪深いものではなかつたが、でも灰色な色調においては信濃の山の上に劣らなかつた。私は遠い旅から帰つて、久しぶりで自分のところへ訪ねて来てくれたものの顔を見た時、それが「冬」だとは奈何しても信じられないくらいに思つた。

遠い旅から帰つて三度目の「冬」を迎えた年ほど私も常盤樹の若葉をしみじみとよく見たためしはなかつた。今まで私は黄落する霜葉の方に気を取られて冬の初めに見られる常盤樹の新葉にはそれほどの注意も払わずにいた。あの初冬の若葉は一年を通

して樹木の世界に見る最も美しいものの一つだ。「冬」はその年も横の緑葉だの、紅い実を垂れた万両なぞを私に指して見せた。万両の実には白もある。ああいう濃い珠のような光沢は冬季でなければ見られない。あの櫛の樹を御覧といつて「冬」がまた私に指してくれたのを見ると、黒ずんでしつかりとした幹や、細くても強健な姿を失わないあの枝は、まるでゴシック風の建築物に見る感じだ。おまけに冬の日をうけた櫛の若葉には言うに言われぬ深いかげやきがあった。

「冬」は私に言った。

「お前はこれまでそんなに私を見損なっていたのか。今年はお前の小さな娘のところへ土産まで持ってきて来た。あの児の紅い頬ほもこの私のこころざしだ。」と。

「貧」が訪ねて来た。

子供の時分からの馴染のような顔付をしたこの訪問者が、復た忸々しく私の側へ来た。正直に言う、この足繁く訪ねて来る客の顔を見る度に、私は「冬」以上の醜さを感じていた。「お前とは旧い馴染だ」とでも言いたげなこの客に対したばかりでも、私の頭は下ってしまった。とても私には長くこの客を眺めてはいられなかった。その私が自分の側へ来たものの顔をよく見ているうちに、今まで思いもよらなかつたような優しい微笑をすら見つけた。私は以前に「冬」に言ったと同じ調子で、この客に尋ねて見ずにはいられなかつた。

「お前が「貧」か。」

「そういうお前は私を誰だと思ふ。そんなに長くお前は私を知らずにいたのか。」
と「貧」が答えた。

「めずらしいことだ。今まで私はお前の笑顔というものを見たこともない。お前にそんな笑顔があろうとは、思つて見たことすらない。私はお前が笑わないものだとはかり思つていた。稀にお前に笑われると、私は身が縮むように厭な気がしたものだ。唯、私はお前に忸れたかして、お前が側にいてくれると、一番安心する。」こう私が言うと、「貧」は笑つて、

「私に忸れてはいけない。もつと私を尊敬して欲しい。よく私に清いという言葉をつけて、「清貧」と私を呼んでくれる人もあるが、ほんとうの私はそんな冷かなものではない。私は自分の歩いた足跡に花を咲かせることも出来る。私は自分の住居を宮殿に変えることも出来る。私は一種の幻術者だ。こう見えても私は世にいわゆる「富」なぞの考えるよりは、もつと遠い夢を見ている。」

「老」が訪ねて来た。

これこそ私が「貧」以上に醜く考えていたものだ。不思議にも、「老」までが私に微笑ほほえんで見せた。私はまた「貧」に尋ねて見たと同じ調子で、

「お前が「老」か。」

と言わずにはいられなかった。

私の側へ来たものの顔をよく見ると、今まで私が胸に描いていたものは真実の「老」ではなくて、「萎縮」であつたことが分つて来た。自分の側へ来たものは、もつと光つたものだ。もつと難有ありがたみ味のあるものだ。

しかしこの訪問者が私のところへ来るようになってから、まだ日が浅い。私はもつとよく話して見なければ、ほんとうにこの客のことは分らない。唯、私には「老」の微笑ということが分つて来ただけだ。どうかして私はこの客をよく知りたい。そして自分もほんとうに年を取りたいものだと思つている。

まだ誰か訪ねて来たような気がする。それが私の家の戸口に佇立たたずんでいるような気がする。私はそれが「死」であることを感知する。おそらく私が以上の三人の訪問者から自分の先入主となつた物の考え方の間違つていたことを教えられたように、「死」もまた思いもよらないことを私に教えるかも知れない。……

(島崎藤村「三人の訪問者」)

*ボオドレエル……シャルル・ボードレール（一八二二〜六七）。フランスの詩人。

*シャヴァンヌ……ピエール・ピュヴィス・ド・シャヴァンヌ（一八二四〜九八）。フランスの画家。

問一 傍線部1について。訪ねて来た「冬」とは、どの「冬」を指していると考えられますか。最も適切なものを次から選び、記号で答えなさい。

- ア 信濃の「冬」 イ 麻布の「冬」 ウ 巴里の「冬」 エ 武蔵野の「冬」

問二 傍線部2について。「自分の先入主」となった「冬」を象徴する色は何ですか。本文より書き抜きなさい。

問三 傍線部3について。「焰」とは何を表現していますか。最も適切なものを次から選び、記号で答えなさい。

- ア 嫉妬 イ 闘争心 ウ 情熱 エ 希望 オ 生命力

問四 傍線部4について。「私」にとつての「その年」の「冬」を表す風物として描かれているものを次から二つ選び、記号で答えなさい。（順不同）

- ア 櫛の若葉
イ 梅の素生
ウ 常盤樹の霜葉
エ 青々として枯れずにいる草地
オ 満天星の新芽
カ 万両の白い実

問五 傍線部5について。「幻術者」とはどのようなものだと考えられますか。最も適切なものを次から選び、記号で答えなさい。

- ア 貧しい者に希望を与え、そこから抜け出ようとする活力をもたらすもの。
- イ 貧しさの中に平安を見出させ、生活を豊かなものとして感じさせるもの。
- ウ 貧しさの中にこそ幸福があるという、逆説的な認識を生み出させるもの。
- エ 貧しい生活をする者を、王侯貴族の生活をしているかのように欺くもの。
- オ 富という世俗的な価値を超越して、一種の悟りの境地に人を導くもの。

問六 傍線部6について。「ほんとうに年を取りたいものだ」とありますが、「老」が訪ねて来る前には筆者は「老」をどのようなものと考えていましたか。本文より漢字二字で書き抜きなさい。

問七 この作品で「訪問者」とされている「冬」「貧」「老」に対して、筆者が発見したものは何ですか。最も適切なものを次から選び、記号で答えなさい。

- ア 想像もつかなかった親しみやすさ。
- イ 気を引き締めてくれる重々しさ。
- ウ 心を痛めつける冷酷さ。
- エ 見聞きしたことのない面白さ。
- オ 人生を見つめ直させる厳粛さ。

問八 本文はどのような表現技法に基づいて描かれていますか。その技法の名称を答えなさい。

問九 島崎藤村の作品を次から選び、記号で答えなさい。

- ア 「 」 イ 「地獄変」 ウ 「破戒」 エ 「細雪」 オ 「暗夜行路」

問題三 (B) 次の文章を読み、後の問に答えなさい。

* さいつ頃、侍従大納言成通といふ人おはしけり。壮年より鞠を好みて、あるいはひとりも、あるいは友に交はりても、これを興じて、日にたゆること侍らざりけり。¹

ある時、最勝光院にて、ことに心をとどめて、蹴給へりけるに、いづくのもの、いづ方より来たりたりとも知らぬ小男の、みめことがらあてやかなるが、うづくまりて侍り。大納言あやしみおぼして、「誰にか」と尋ね給ふに、「我はこれ鞠の精なり。君のめでたく蹴給ふによりて、鞠の姿をあらはすになむ」とて、かき消すやうに失せにけり。その後もたびたび、先のごとくなる男出できて、目をもたたかず鞠を見て侍りけり。いと不思議にぞ侍る。²

反りたる杵を履きて、清水の舞台の高欄にて鞠を蹴給ひけるを、父の宗通の大納言、あさましよううつ心なくおぼえ給ひて、このこと諫めむとて、呼び寄せ給ひけるに、畳の上、五寸ばかりあがりておはしければ、化人にこそと思ひ給ひければ、手を合はせ拝みてのき給ひけるを、成通も大きに恐れ給ひけりとぞ。³

かの大納言のたまひしは、鞠は、用明天皇の御時、太子の御つれづれをなぐさめたてまつらむとて、月卿雲客の造り出だし給へり。太子の鞠、めでたくおはしけり。朝のほど一時は、人も召されで、いづくのところをもさしまはして、ひとりあそばしけるに、声は数十人が声のし侍りけり。これは三世の賢聖たちのあそばすとも申す。また、鞠の精どもなりとも申す。何とも知りたく侍り。ただし、『扶桑記』には、「その跡、妙に香ばし」と記し侍りぬれば、げにも仏たちのあそばしけるにこそ。いとめでたく貴くぞ侍る。⁴⁵

〔撰集抄〕

* さいつ頃……先頃。

* 成通……平安時代後期の貴族。蹴鞠の名人として知られる。

* 最勝光院……現、京都市東山区にあったとされる寺院。

*目をもたたかず……瞬まはたきもせず。

*清水……現、京都市東山区にある清水寺。

*高欄……舞台を囲む手すり。清水寺の舞台は高い崖の上につくられた。

*五寸……一五センチメートル程度。

*化人……神仏の化身など。

*用明天皇……六世紀後期に在位。太子（聖徳太子）の父にあたる。

*三世の賢聖……過去・現在・未来の聖者や賢者。

問一 傍線部①「大納言」、②「失」、③「月卿雲客」の読みを、平がなで答えなさい。（現代仮名遣いでよい）

問二 傍線部1「日にたゆること侍らざりけり」の意味として、最も適切なものを次から選び、記号で答えなさい。

ア 我慢強く練習を欠かさなかった。

イ 日々、練習のことが頭から離れなかった。

ウ 毎日、練習を欠かすことがなかった。

エ 日によつては練習することを忘わすれた。

オ 陽が沈む前に練習をやめることはなかった。

問三 二重傍線部「蹴」の活用を次から選び、記号で答えなさい。

ア 下一段活用 イ 上一段活用 ウ 四段活用 エ 上二段活用 オ 力行変格活用

問四 傍線部 A 「あてやかなる」、B 「うつつ心なく」の意味として、最も適切なものを次からそれぞれ選び、記号で答えなさい。

A 「あてやかなる」

ア 小柄な イ 豪華な ウ 質素な エ 神聖な オ 優雅な

B 「うつつ心なく」

ア 鬱陶しく イ 憤って ウ 虚しく エ 平常心を失って オ 苦々しく

問五 傍線部 2 「いと不思議に」について。どのようなことが「不思議」のですか。三〇字程度でまとめなさい。

問六 傍線部 3 「手を合はせ拝みてのき給ひける」について。どうしてこのようなことをしましたか。最も適切なものを次から選び、記号で答えなさい。

ア 宗通が清水寺の舞台の上を楽しそうに浮遊していたので、宗通は我が父ではなく観音菩薩の化身だと思ったから。

イ どのような場所でも巧みに蹴鞠の技を披露する宗通を見て、我が父ながらも鞠の神様として崇めようとしたから。

ウ 清水寺の舞台で鞠遊びをするのは失礼だと息子を諫めようとしたが、その上手さに思わず感動してしまったから。

エ 場所柄をわきまえず蹴鞠をする息子を諫めようとしたが、成通が空中に浮いているのを見て仏の化身だと察したから。

オ 蹴鞠にうつつを抜かす成通を見て、父として叱咤するつもりが、その神業のような技術に心動かされたから。

問七 傍線部 4 「御つれづれをなぐさめたてまつらむ」を現代語訳しなさい。

問八 傍線部5「ひとりあそびしけるに、声は数十人が声のし侍りけり」とは、どのような状況ですか。最も適切なものを次から選び、記号で答えなさい。

- ア 太子がひとりで蹴鞠をしていて寂しそうなので、多くの鞠の精や仏たちが気の毒に思つてこっそり遊んであげていた。
- イ 太子はひとりで蹴鞠をしているように見えて、実は鞠の精や仏たちなど人の眼には見えないものたちと楽しんでいた。
- ウ 太子の蹴鞠の素晴らしさに多くのファンが集まり、人だけでなく神仏も声援を送つて、その演技に夢中になっていた。
- エ 太子の蹴鞠には霊力があるので、人を遠ざけ、超自然的現象をたびたび起こし、神聖な香りを漂わせていた。
- オ 太子はひとりで蹴鞠をして、人の眼には決して触れてはいけない精霊や神仏を招く極めて神聖な儀式を行っていた。

問九 『撰集抄』は鎌倉時代に成立した作品です。鎌倉時代に成立した作品を次から選び、記号で答えなさい。

- ア 『古事記』
- イ 『大鏡』
- ウ 『新古今和歌集』
- エ 『伊勢物語』
- オ 『古今和歌集』